

## 混種語の語構成

白井清子

筆者は奈良時代から江戸時代までを奈良・平安・院政・鎌倉・室町前期・室町後期・江戸前期・江戸後期の八つの時代に分け、各時代の種々の資料に現れる混種語について調査した。そして、それらの混種語およびその形態素に関しどのような時代的变化が見られるかを次の二つの稿にまとめた。

「混種語から見た各時代の造語の諸相」(『学習院女子短期大学紀要 第28号』所収)(以下「前稿①」とする。)(注1)

「混種語に現れる和漢の形態素」(『学習院女子短期大学国語国文学会『国語国文論集 第二十九号』所収)(以下「前稿②」とする。)

本稿はこれらの調査をもとに、その混種語に見られる語構成について調べた結果の報告である。

### 1. 和語形態素と漢語形態素の結び付き方

混種語は語構成上どんな特色があるのか。時代による相違が見られるのか。それらについて今回は調べてみた。

まず混種語を次の四種に分類する。

1. 「和語形態素+漢語形態素」の結び付きによるもの 例：手本、申し状、大勢(以下「和+漢」と略記)
2. 「漢語形態素+和語形態素」の結び付きによるもの 例：殿上人、両手、分捕り(以下「漢+和」と略記)
3. 一度上記1または2のかたちで混種語としてできたものに更に別の形態素が結合して複次的にできたもの 例：今様歌、煎じ薬、隣り座敷(以下「複次結合」と略記)

4. 外来語形態素を含むもの 例：黒ビロウド，タバコ盆，咬ヘギセル（以下「含む外来」と略記）（注2）

この四種のいずれであるかについて調べた結果を時代ごとに示す。表1には前稿①の調査で出現した混種語の全部についての数を示す。表2には同じ前稿①で各時代の代表的な混種語と考えられるとして「語彙表」に掲げた語についての数を示す。（前稿①の「語彙表」には各時代ごとに二あるいは三資料以上にわたって出てくる混種語をあげてある。但し、奈良時代は全部。）

表1 各時代の混種語全体の語構成（数字は上段が実数，下段が％）

	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前	室町後	江戸前	江戸後
和+漢	2 33.3	287 50.3	179 43.8	553 62.1	541 56.2	954 47.8	707 43.6	652 42.6
漢+和	4 66.7	240 42.0	198 48.4	285 32.0	363 37.7	921 46.2	703 43.4	661 43.2
複次結合		44 7.7	32 7.8	53 5.9	59 6.1	119 6.0	190 11.7	196 12.8
含む外来							21 1.3	22 1.4
合計	6	571	409	891	963	1,994	1,621	1,531

表2 各時代の代表的な混種語の語構成

	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前	室町後	江戸前	江戸後
和+漢	2 33.3	46 54.8	30 44.1	99 65.6	72 58.5	185 52.9	72 43.1	72 41.1
漢+和	4 66.7	34 40.5	35 51.5	44 29.1	48 39.0	153 43.7	79 47.3	85 48.6
複次結合		4 4.8	3 4.4	8 5.3	3 2.4	12 3.4	14 8.4	14 8.0
含む外来							2 1.2	4 2.3
合計	6	84	68	151	123	350	167	175

奈良時代は混種語の数が少ないので、この数だけで云々するのは難しい。

表1と表2では比率の異なる場合もあるが、大きな傾向としては変わらないといえるであろう。

表1を見ると、平安・院政・室町後期・江戸前期・江戸後期では、和+漢と漢+和の比率の差はいずれも10パーセント以下であり差はない。特に混種語の数が増大する室町時代後期以降は両者の比率が非常に接近している。一方、鎌倉・室町前期の両期においては、漢+和に比べて和+漢の比率が非常に高い。

表2では、和+漢と漢+和の比率は表1より開いているが、各時代の傾向としてはあまり変わっていない。鎌倉・室町前期は、やはり他の時代よりも漢+和に比べて和+漢の比率が高くなっている。両期に次いで平安時代でも和+漢の方が比率が高い。

和語形態素と漢語形態素とでは、形態素の数の上でどの時代もあり差は無かった（前稿②参照）。すると、鎌倉・室町前期の両期は他の時代と何か異なる事情があるのだろうか。あるいはまた、院政時代と室町後期以降とは似たような状況があるのだろうか。そのようなことを探るためには他の点についてもう少し調べてみる必要がある。

複次的結合をなす混種語は江戸前期・江戸後期には比率が高くなる。これは当然予想される状態である。一度できた混種語に更に他の要素が付いてまた別の新しい語ができるという、この複次的結合は、混種語そのものの数がある程度多くならないと増加しないと思われるからである。

## 2. 品詞上から見た語構成

和+漢の場合と漢+和の場合とではなにか違いがあるのであろうか。すべての混種語について調べるのは困難なので、前稿①で各時代の代表的な混種語と考えられるとして「語彙表」に掲げた語、すなわち、表2にあげた語について、品詞上からどういう結合のしかたがなされているのかを調べた。品詞といってもここでは厳密な文法的用語として使っているのではなく、便宜

的なものである。次のように分類した。( )内は略号。

(名) ……名詞。

(動) ……動詞。和語形態素の場合は動詞から転生した居体言。漢語形態素の場合は動作を表すもの。

(接) ……接辞。和語形態素の場合は形容詞語幹，形容動詞語幹，数詞，その他形容の意味を持ち名詞でないもの。

例えば，「白(しろ)」は名詞に，「白(しら)」は接辞に含めた。

### 各時代の語構成「分類表」 数字は該当する混種語の数

#### 奈良時代(6)

##### 和+漢(2)

名+名 2 女<sup>め</sup>餓鬼 男<sup>お</sup>餓鬼

##### 漢+和(4)

名+名 4 高麗<sup>こま</sup>剣 高麗<sup>こま</sup>錦 新羅<sup>しらぎ</sup>斧 力士舞

---

#### 平安時代(84)

##### 和+漢(46)

名+名 17 東三条 中障子 今様<sup>おも</sup> 面様 顔様 手本 網代屏風 足駄 歌絵 下  
絵 女絵 唐絵 壺装束 棚厨子 黒方 仏経<sup>ひとつもと</sup> 一本菊

接+名 18 然様 斯様 斯う様<sup>こと</sup> 異様<sup>いかやう</sup> 如何様 薄様 薄紅梅 薄蘇枋<sup>ひと</sup> 白菊<sup>ひと</sup> 固  
紋 小少将 小一条 小宰相 小侍従 小法師<sup>ひと</sup> 一文<sup>ひと</sup>字 一具<sup>ひと</sup> 三十文  
字

動+名 6 狩装束 蒔絵 浮紋 懸け盤 作り絵 有り様

名+接 1 大蔵卿

名+動 3 御岳精進 心懸想 名対面

その他 1 物の具

##### 漢+和(34)

名+名 21 釈迦<sup>はとけ</sup>仏 薬師仏 阿弥陀仏 草仮名 殿上童 絵所 衛府司 今衛司  
厨司所 台盤所 内侍所 絵物語 紫苑色 蘇枋襲 女房車 殿上人  
檳榔毛 染屋 例ざま 経箱 経仏

動+名 2 懸想人 精進物

名+接 6 尼上 尼君 二郎君 三郎君 太郎君 院方

名+動 5 香染め 絵書き 碁打ち 地摺り 宣旨書き

#### 複次の結合 (4)

らうたげさ 十日余日 二十日余日 今様歌

---

#### 院政時代 (68)

##### 和+漢 (30)

名+名 15 花香 唐装束 紙銭 旅装束 足駄 曾孫弟子 猿楽 なにがし大徳  
今様 あやめ綬 くつつ法師 女法師 主殿寮 青瓷 下法師

接+名 12 然様 斯様 斯う様 斯く様 異様 如何様 薄様 斑ら幕 小一条  
小大徳 小院 一文字

動+名 3 狩装束 沃懸け地 老い法師

##### 漢+和 (35)

名+名 25 轆轤鉤 笏木 新羅琴 台盤所 帖木 錢瘡 錢がた 錢貫 三衣箱  
殿上人 釈迦仏 阿弥陀仏 釈迦牟尼仏 色紙形 基石 料 芭蕉葉  
鬘茎 楽屋 法師子 蜜蜂 阿弥陀魚 経袋 鮫魚 二毛

接+名 1 寒蟬

名+接 2 尼君 京ざま

名+動 6 錢打ち 任果て 博奕 香染め 斗概 半月

その他 1 貫の木

#### 複次の結合 (3)

今様姿 らうたげ 術無げ

---

#### 鎌倉時代 (151)

##### 和+漢 (99)

名+名 34 奈良法師 三井寺法師 寺法師 山法師 山寺法師 盲法師 京童部  
伊勢平氏 伊勢武者 田舎武者 黒方 あれ体 これ体 今様 火鉢  
船楽 足駄 猿楽 明かり障子 唐瓶子 桜絵 下絵 芝田楽 手勢  
手本 時非時 時料 仏経 白装束 白覆輪 黄覆輪 青地 赤地 下  
法師

- 接＋名 39 然様 斯様 斯う様 異様 薄様 如何様 如何体 幾千万 白菊 白  
 拍子 若党 若大衆 荒儀 固紋 なま女房 古堂 長覆輪 濃染紙  
 滋籐 小冠 小式部 小大進 小冠者 小法師 小太郎 小勢 小門  
 小具足 小侍従 大勢 大番 大様 大二条 大柑子 一文字 わ僧  
 わ法師 わ御房 わ党
- 動＋名 15 申し状 沃懸け地 老い法師 折り烏帽子 立て烏帽子 立て様 継ぎ  
 琵琶 有り様 申し様 塗り籠め籐 振り不動 駆り武者 狩装束 蒔  
 絵 返り忠
- 名＋接 6 母御前 父御前 伯母御前 大蔵卿 家隆卿 伊通公
- 名＋動 2 仏供養 熊野参詣
- 動＋動 2 書き供養 取り沙汰
- その他 1 物の具

#### 漢＋和 (44)

- 名＋名 26 鬢髭 闕伽棚 同士戦 法螺貝 弥陀仏 色紙形 庖丁刀 水干袴 下  
 種男 下種女 例ざま 糶太瓶 内侍所 武者所 台盤所 台所 今衛  
 司 家屋 馬場 三衣箱 経箱 経袋 女房車 胡人 殿上人 三ヶ夜
- 動＋名 2 懸想文 続飯
- 名＋接 5 院方 尼上 尼君 京ざま 御所ざま
- 名＋動 9 女御参り 琵琶弾き 絵書き 詩歌合せ 京上り 香染め 博奕 座敷  
 絵合せ
- 接＋接 2 不思議さ 御達

#### 複次の結合 (8)

白薄様 大御堂 小御堂 高足駄 平足駄 台盤所様 大番衆 らうた  
 げ

#### 室町時代前期 (123)

##### 和＋漢 (72)

- 名＋名 18 山法師 奈良法師 猿楽 手本 手勢 弓勢 今様 足駄 翁面 掃部  
 寮 日番 棟門 此れ体 二所籐 白覆輪 末座 横座 赤地
- 接＋名 26 然様 斯様 如何様 白拍子 薄様 若党 若大衆 広縁 古御所 な  
 ま女房 直面 重籐 逆櫓 小具足 小冠者 小式部 小兵 小鬘 小  
 法師 小門 小勢 大勢 大幕 大入道 大様 わ僧

- 動＋名 16 立て烏帽子 折り烏帽子 沃懸け地 申し状 蒔絵 譲り状 浮紋 云  
ひ様 着様 取り様 持ち様 指図 疲れ武者 似せ絵 折り句 狩装束
- 名＋接 7 鎌倉中 國中 定家卿 為家卿 俊成卿 母御 母御前
- 名＋動 1 熊野参詣
- 動＋動 1 云ひ沙汰
- 接＋動 2 薄化粧 小朝拝
- その他 1 物の具

#### 漢＋和 (48)

- 名＋名 20 内侍所 台盤所 武者所 和歌所 馬場 楽屋 殿上人 烏帽子親 烏  
帽子子 鬘櫛 京極表 獅子頭 四方輿 連銭葦毛 兵庫鎖 地白 四  
方白 胴丸 胴中 五枚甲
- 接＋名 5 乱杭 雑車 半時 当腹 大力
- 動＋名 1 聴聞所
- 名＋接 4 御所方 京方 二度目 二番目
- 名＋動 16 烏帽子懸け 調度懸け 座敷 赤銅作り 鉢付け 鉢巻き 地摺り 分  
捕り 北国落ち 仁王立ち 緋絨し 香染め 御幸初め 文字移り 五  
人張り 三人張り
- 接＋接 2 無念さ 不思議さ

#### 複次的結合 (3)

若殿上人 三番猿楽 御影堂

#### 室町時代後期 (350)

##### 和＋漢 (185)

- 名＋名 67 足駄 猿楽 棟別 蚊張 手本 手棒 手拍子 手勢 手者 手便 手  
間賃 襖障子 杉障子 明かり障子 烏居障子 湯桶 冠木門 唐納豆  
木鐸 鷹匠 野武士 結桶師 桧物師 唐紙師 歳徳 墨絵 鞆絵 梨  
地 木地 摺糊鉢 火鉢 従兄弟同士 今様 河郎 虚無僧 角帽子  
人質 所質 目様 餌食 跡式 あれ体 衣被香 えび鎖 酒奉行 蔵  
奉行 荷奉行 侍品 影法師 山法師 徒武者 側女房 酢菜 口伎倆  
ほほ甲 身勢 女郎 糠味噌 軒瓦 外様衆 いづれ篇 何篇 何年  
下京 下座 下地 下絵

- 接+名 41 然様 斯様 如何様 如何体 薄様 薄紅梅 白菊 白拍子 若党 若衆 荒武者 重藤 高檉紙 長具足 平百姓 広縁 古儒者 葉武者  
速香 片一方 逆櫓 そら道者 幾千万 わやく人 小宰相 小姓 小僧 小兵 小鬘 小門 小文字 小勢 大勢 大様 大茶碗 大幕 大門 大文字 一文字 一合戦 八つ撥
- 動+名 54 相図 指図 語らひ勢 懸け盤 相性 立ち烏帽子 立て烏帽子 立て派 建て具 塗り籠め籐 空き地 売り券 割符 切符 割り符 召し符 支え状 譲り状 副へ状 衝立ち障子 衝立て障子 詰め番 追ひ膳 馬廻り衆 年寄衆 詰め衆 詰め陣 詰め牢 合せ香 有り様 返り忠 摺り鉢 蒔絵 濃み絵 奪ぎ胴 挙句 延べ句 揚げ灯籠 荒れ地 請け人 持ち具足 分け分 折り本 置き字 書き様 駈り武者 継瓶子 つつみ具足 引き入れ合子 引き両 つれ平家 為様 透廊 助け勢
- 名+接 11 國中 島中 父御 母御 嫁御 祖父御 姉御前 姫御前 嫁御前 下無 荷物
- 名+動 5 手着 手作 日傭 輪束 すね苦行
- 動+動 1 取り沙汰
- 接+動 1 薄化粧
- 接+接 3 真っ最中 片便宜 わ御前
- その他 2 其の方 物の具

漢+和 (153)

- 名+名 68 蠟色 櫓檣 薬研堀 味噌水 鬘盤ひ 鬘髭 鬘櫛 番子 団子 撥音 蝶番 筒木 風呂屋 楽屋 店屋 千駄櫃 高麗笛 狛犬 殿上人 馬場 虎口 骨柄 連銭茸毛 健児所 膳棚 台盤所 堂鳩 雁木 柑子 栗毛 京物語 公方事 才榼 数珠玉 同士軍 基箭 基石 獅子舞 素袍袴 銭函 法螺貝 落胤腹 香箱 香箸 内侍所 台所 關伽棚 桔梗皿 幕串 劍鏃 高麗べり 雲綱べり のうぜんかづら 袍裳 味噌囊 会下傘 烏帽子屋 半挿壺 似我蜂 茶桶 茶磨 茶壺 茶袋 胴丸 夫丸 十二時 十二単 四十がら 一廉
- 接+名 12 両足 重棚 重箱 大力 先手 総政所 総並み 臆病者 乱杭 半道 半首 赤熊
- 動+名 9 遁世者 化粧軍 御座所 御座舟 懸想文 合戦場 打眠衣 続飯 量桶



- 名+接 5 馬鹿げ 体たらく 時分柄 情強<sup>こほ</sup> 四番目
- 名+動 47 定使ひ 定詰め 調度懸け 勢くばり 勢揃へ 勢立て 斗概<sup>とがき</sup> 鉢叩き  
 門固め 文字読み 番代り 絆切り 頭切り<sup>づ</sup> 同士討ち 毒絶ち 気散  
 じ 気逆ひ 気遣ひ 勢遣ひ 紺搔き 陣替へ 鉢巻き 茶節 陣払ひ  
 陣取り 地取り 将棋倒し 宿送り 代替り 索麵被き<sup>そうめんかつ</sup> 次第下り 朱  
 引き 後家入り 金口打ち<sup>こんく</sup> 博奕 娑婆塞げ 座敷 緋絨し 菊綴じ  
 毒まくり 分捕り 香包み 甲張り 傾城狂ひ 牢朽たし 絵描き 味  
 噌漉し
- 動+動 2 変替へ 存じ
- 接+接 2 不思議さ 緩怠げ
- 接+動 3 不出来 摠煩ひ 雑煮
- その他 5 万が稀 茶の子 茶の湯 貫の木 二の舞

#### 複次的結合 (12)

又若党 博奕うち 小座敷 続飯板 煎じ菓 鉄撮棒<sup>かねさい</sup> 絵の具 蒔絵師  
 上無調<sup>かみ</sup> 摺り茶壺 鬱陶しさ 追ひ膳折敷

#### 江戸時代前期 (167)

##### 和+漢 (72)

- 名+名 25 手本 手代 名代 そ文字 か文字 石風呂 糸鬘 今様 櫛道具 毛  
 頭巾 姿絵 砂地 辻堂 科人 梨地<sup>かなしやう</sup> 庭銭 値段 枕屏風 家賃 湯  
 桶 内衆 上京 下京 下地 金性
- 接+名 14 斯様 然様 如何様 若衆 若党 厚鬘 浮気 小判 小坊主 大勢  
 大書院 大百姓 大様 生醬油
- 動+名 20 云ひ分 相図 指し図 有り様 出し様 為様<sup>し</sup> 着け様 遣り様 掛け  
 算 懸け帳 替へ草履 摺り鉢 使ひ番 吊り行灯 寝道具 触れ状  
 蒔絵 連れ衆 着類<sup>き</sup> 望み次第
- 名+接 7 娘御 親御 父御 母御前 頼朝公 大坂中 白無垢
- 名+動 2 是れ沙汰 歌念仏
- 動+動 1 取り沙汰
- 接+動 1 大服
- その他 2 其の方 此の中

漢+和 (79)

名+名 33 相場 台所 地色 遊女町 傾城町 烏帽子親 烏帽子子 香箱 撥音  
観世こより 胴骨 性根 数珠玉 棕櫚<sup>しゆ ろはき</sup>帚 鬢水 法螺貝 紋所<sup>もんばしら</sup> 門柱  
紋白<sup>う</sup> 役者子供 厄年 質屋 風呂屋 呉服屋 紺屋 牢屋 茶屋 茶  
船 茶釜 緑組 朱鞘 一廉 十二単

接+名 5 両袖 両手 大目 両隣り 重箱

動+名 1 分別所

名+接 7 畜生め 一匁 一貫目 二貫目 三貫目 十貫目 三百目

名+動 27 氣遣ひ 座敷 衣裳つき 念入り 一日暮し 一足飛び 膏藥売り 金  
拵へ 貫刺し 傾城狂ひ 草履取り 茶入れ 女郎狂ひ 亭主振り 檀  
那回り 銭差し 毒断ち 土用干し 太鼓打ち 太鼓持ち 仁王立ち  
博奕 鉢開き 棒尽くめ 味噌漉し 紋付き 地謡

動+動 1 存じ

接+動 2 諸分け<sup>しよ</sup> 不断着

接+接 1 貴様

その他 2 茶の湯 貰の木

複次的結合 (14)

興覚め顔 氣遣ひさ 口説き泣き 二階座敷 片小鬢 氣の毒 小座敷  
担ひ茶屋 茶屋酒 煎じ茶 封じ目 若衆出で立ち 風呂敷包み 緋縮  
緬

外来語を含むもの (2)

タバコ盆 キセル筒

江戸時代後期 (175)

和+漢 (72)

名+名 26 手代 名代 駒下駄 素人狂言 かたき役 草双紙 今時分 心意気  
口三味線 裾模様 吸物椀 す文字 ゆ文字 隣り同士 値段 皿鉢  
火鉢 ひより下駄 わら草履 泥坊 こんた衆 山岡頭巾 伊勢音頭  
下地 黒繻子 子供衆

接+名 24 然様 如何様 白拍子 若旦那 若党 若い衆 いい加減 浮気 小僧  
小菊 小提灯 小判 小紋 大旦那 大風 大本多 大門 大勢 三蒲  
団 お陀仏 しち面倒 へぼ将棋<sup>かな</sup> べらぼう 鉄棒

- 動＋名 11 合はせ鬢 相図 指図 謝まり証文 言ひ分 出放題 為様 摺り鉢  
立ち役 畳み算 水かけ論
- 名＋接 8 江戸中 顔中 うち中 長屋中 殿御 嫁御 娘御 荷物
- 動＋動 2 立ち往生 取り始末
- その他 1 此の中

#### 漢＋和 (85)

- 名＋名 33 利方 家台骨 牡丹餅 浪人者 版元 鉢肴 新内節 銭金 洗濯物  
知恵袋 性根 状箱 茶粥 茶釜 茶屋 楽屋 女郎屋 土手 唐茄子  
金玉 琥珀縞 蒟蒻玉 相場 拍子木 紋所 獅子鼻 大福餅 地口  
地主 台所 胴間声 業腹 馬鹿者
- 接＋名 8 半道 両手 中っ腹 中年増 初手 新道 半襟 重箱
- 動＋名 1 連休
- 名＋接 15 坊主め 馬鹿め 野郎め 敵め 唐人め 畜生め 餓鬼め 不思議そう  
気儘 気さく 二番目 三番目 四篇目 六刃 台無し
- 名＋動 21 気遣ひ 気遣ひ 気付け 気取り 気持ち 業さらし 三年越し 三人  
連れ 鉢巻き 棒組み 座敷 太鼓持ち 女郎買ひ 新造買ひ 草履取  
り 土用干し 銅羅焼き 地回り 意趣返し 茶漬け 重詰め
- 動＋動 2 案じ 存じ
- 接＋動 3 不躰 不断着 雑煮
- 接＋接 2 貴様 両側

#### 複次的結合 (14)

料理茶屋 水茶屋 風呂敷包み 緋縮緬 縞縮緬 鼠縮緬 黒縮緬 奥  
座敷 小鬢先 べらぼうめ 気散じ 気の毒 気の毒そう 隣り座敷

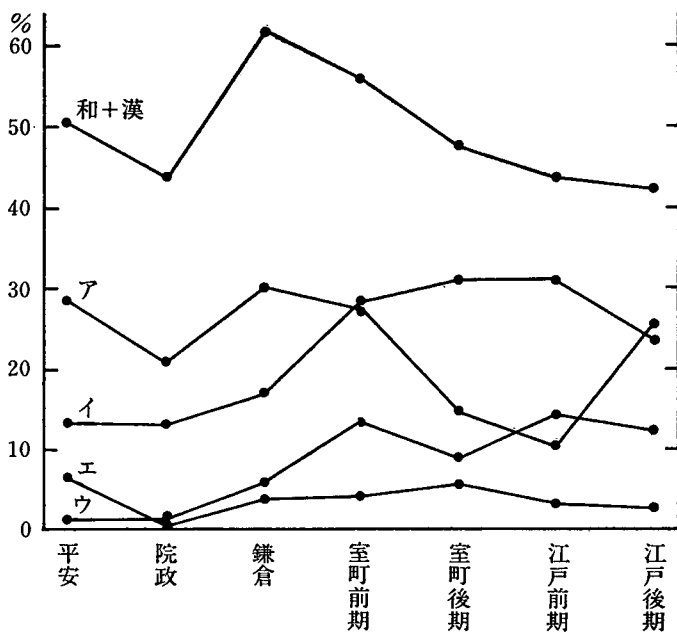
#### 外来語を含むもの (4)

咬ヘギセル 黒ビロウド タバコ入れ タバコ盆

表3 数値はいずれも和+漢、漢+和を合わせたもの(数字は上段が実数、下段が%)

	奈良	平安	院政	鎌倉	室町前	室町後	江戸前	江戸後
ア 和語形態素の接辞を含むもの	0 0	24 28.6	14 20.6	46 30.5	34 27.6	52 14.9	17 10.2	41 23.4
イ 和語形態素の動詞を含むもの	0 0	11 13.1	9 13.2	26 17.2	35 28.5	107 30.6	51 30.5	39 22.3
ウ 漢語形態素の接辞を含むもの	0 0	1 1.2	1 1.5	8 5.3	16 13.0	31 8.9	24 14.4	21 12.0
エ 漢語形態素の動詞を含むもの	0 0	5 6.0	0 0	6 4.0	5 4.1	18 5.1	6 3.6	5 2.9

図1



「分類表」にもとづいて特に注目すべき数値を抜き出したのが表3，それをグラフにしたのが図1である。図1には表1における和+漢の比率も併せて示した。なお，奈良時代はもともと混種語が6例しかないので図1から省いた。

表3は前項，後項のいずれかに次のような形態素を含む語の数である。

- |   |          |  |
|---|----------|--|
| ア | 和語形態素の接辞 | 例： <u>大勢</u> <u>薄化粧</u> <u>不思議さ</u> <u>坊主め</u>     |
| イ | 和語形態素の動詞 | 例： <u>譲り</u> 状 <u>立ち</u> 往生 <u>気遣ひ</u> <u>不出来</u>  |
| ウ | 漢語形態素の接辞 | 例： <u>両足</u> <u>雑煮</u> <u>娘御</u> <u>鎌倉中</u>        |
| エ | 漢語形態素の動詞 | 例： <u>懸想</u> 文 <u>存</u> じ <u>熊野参詣</u> <u>取り</u> 沙汰 |

「分類表」および図1から言えるのは次のようなことである。

第一に，奈良時代はもちろんのこと，平安・院政あたりまでは和+漢，漢+和ともに名詞+名詞が多い。その後もずっと名詞+名詞のものが多く，後世になるとそれ以外の結び付き方も増えてきて，結び付き方が段々ヴァリエティーに富んでくる。

第二に，「なま～」や「～げ」のような，和語形態素の接辞を含む比率は鎌倉・平安・室町前期の順に高く，室町後期・江戸前期は低い。この傾向は図1からもわかるように，和+漢の比率を示す曲線によく似ている。和語形態素の接辞の中で特に多く出てくるのは「大（おほ）～」や「小（こ）～」などであるが，これらはどの時代をも通じて種々の形態素と結び付くことができる，日本語の中ではもっともポピュラーな造語成分である。このような接辞が漢語につくと当然，和+漢の混種語が多くなる。和+漢の中で名詞+名詞の数よりも接辞+名詞の数が多い平安・鎌倉・室町前期に和+漢の比率が高くなっていることがそれを裏づけている。

但し，江戸後期ではこのような接辞を含む比率がかなり高いにもかかわらず，和+漢の比率は高くない。それは，漢語形態素の中にも「両～」や「中～」のような接頭辞がよく使われるようになっていること，漢語名詞+和語動詞の組み合わせが多いことなどがあげられようが，あまり明確な点を指摘する

ことはできない。そういうことよりもむしろ、混雑語が増えると和+漢、漢+和のどちらか一方に極端に偏らなくなることだろうと思われる。ちなみに表1と表2を比較した場合、表2におけるよりも表1の方が和+漢と漢+和の差は小さい。

第三に、「取り」「作り」のように、和語形態素の動詞を含むものは時代が下るほど増加する傾向が見られる。(和語形態素で時代が下るほど動詞が増加することについてはすでに前稿②でも示した。)ところが、同じ動詞(動作を表すもの)でも漢語形態素の場合は時代が下っても増加していない(図1のエ)。阪倉篤義氏は、時代が下るほど和語の複合語の中で居体言(筆者白井が動詞と分類したもの)が増える点を指摘し、名詞+名詞の結び付きの場合は二つの名詞の関係が曖昧であるが、居体言を含む場合は複合語の二つの要素の格関係が明確になり、機能を分析的に明確に表示するように変化してきた日本語の大きな流れに則したものであるというような意味のことを述べている(注3)。確かにそういう面もあろうが、動作性を含んだ種々の表現を考えると次のようなことも考えられる。例えば、はじめは単に「あそび」と単純語で表現していた段階があったであろう。しかし、これではあまりに意味が広く漠然としている。そこで和語形態素と結びついて「船遊び」とか「遊びぐさ」ということばを造る。和語形態素と結びつけて種々の表現をしていくと次第に、もっと特定の動作なり動作にかかわるものやことがらを表現したくなってくる。しかし、和語形態素同士では限界がある。ところが、表3のエの数値が示すように、漢語形態素の動詞の場合は、それらが自由に種々の形態素と結び付いて、次々と新しい表現を造り出すということができない。となれば、残っているのは和語形態素の動詞に漢語形態素の名詞を結びつける方法である。そこで例えば、「<sup>がく</sup>所あそび」「<sup>らく</sup>所あそび」「あそび法師」などの語を造る。混雑語の中で和語形態素の動詞が、時代が下るほど増加するのは、このように漢語形態素の動詞が種々の形態素と自由に結び付くようになっていないことが要因としてあると思われる。

第四に、同じ漢語形態素でも「大(だい)～」や「～中(ちゅう)」のよ

うな接辞、つまり形容を表す接頭辞や付属的な意味を付加する接尾辞は時代が下るにしたがって増加してくる。これはさきに述べたことと関連するが、「分類表」を見ればわかるようにそれらの接辞は同じものが多く使われておりヴァリエティーに富むとは言えないが、かなり自由に種々の形態素についている。加えて注目すべき点は、室町時代後期以後「不出来」「不様」のように「不～」のかたちが出てくることである。このような否定を示す形態素が合成語の前項にくるのは通常の和語の語構成にはないものである。このような語が出現するのは当然下地として「不断」「不通」「不案内」のような「不～」のかたちの漢語があって、しかもそういうかたちに相当馴れていたことが汲み取れる。

漢語形態素の場合、名詞が一番取り入れられやすく、また、他の形態素とも結び付き易かったのはもちろんであるが、それに次ぐのは接辞であり、動詞が一番造語という点では取り入れられにくかったことがわかる。

### 3. まとめ

混種語の語構成も基本的には和語の合成語に見られる語構成によっている。これは言い換えれば日本語の文の構造にかなうような構成になっているということである（注4）。その意味で「不出来」のような「不～」のかたちも、本来の和語には見られないながらも「修飾—被修飾」という日本語の文構造に逆らわないものとして、多くの漢語に馴れたのちには和語の形態素と結び付いた混種語としても作りだされるようになったのであろう。しかし、「動詞—目的語」のような構造の語は漢語それ自身の中では一般的であっても日本語の文構造になじまないゆえに、混種語としては江戸時代後期までのこの調査では出現してこなかったと思われる。「漢語形態素の動詞A+和語形態素の名詞B」の形式をもつ混種語は少なくないが、それらはいずれも「AするところのB」のように「修飾—被修飾」の構造をなすものばかりである。現代語では少数ながら「省エネルギー」「防かび」のように「BをAすること」という「動詞—目的語」の混種語がある。このような語構成の混種語が

いつから出現するようになったのか明らかでないが、少なくともこれらの語が現代語にあるのは、漢語の語構成ばかりでなく、同じく「動詞一目的語」が文構造として一般的である英語にわれわれが馴れてきていることも大きく関与していると思われる。

更に付け加えれば、借用語として漢語を採り入れたとき、名詞、接辞、動詞の順で自由に造語できるようになったことを考えると、外来語を形態素として新しい語を作り出す場合も似たような順序で採り入れられると推定するのもあながち無茶なこととは言えないであろう。

注1 前稿①の p.68 表1に誤りがあったので次のように訂正する。

	誤	正
平安の合計	570	571
平安の%	14.6	14.7
室町後期の資料数8の欄	2	9
室町後期の※	341	350

注2 外来語形態素を含み、且つ、複次的結合をなすものは前稿①における調査全体の中で「さげタバコ盆」一語のみであった。これは「複次結合」ではなく「含む外来」の方に入れた。但し、この語は一資料にしか出てこないため、「分類表」には含まれない。

注3 阪倉篤義『語構成の研究』p.473（昭和41年 角川書店）

注4 奥津敬一郎「複合名詞の生成文法」『国語学101集』

鈴木丹士郎「二字漢語の字順についての問題」p.279『国語論究1 語彙の研究』（1991年 明治書院）

参考文献（上記以外の主なもの）

山田孝雄『国語に中に於ける漢語の研究』（昭和15年 宝文館出版 復刻版昭和45年）

加茂正一『新語の考察』（昭和19年 三省堂）

見坊豪紀「明治前期の用語『応為』『応有』について」『国語学44・45集』

森岡健二『近代語の成立 明治期語彙編』（昭和44年 明治書院）

（しらい きよこ 本学非常勤講師）